

2013年 南仏アヴィニョン・フェスティバル 参加報告

2013・8 花柳衛菊

アヴィニョン・フェスティバルは、パリから高速列車 TGV で3時間、プロヴァンス地方アヴィニョンで毎年7月に3週間開催される演劇祭である。直径1.2キロの城壁の中で1200以上のカンパニーが毎日、屋内外で公演を続ける。私は毎年自分の作品を持って、13年間このフェスティバルに参加し続けている。10日の真夜中に日本を出発し、12日からの15回連続公演を終え、昨日28日にパリに着いた。英国エジンバラ・フェスティバル参加から17年間、計18回目の海外フェスティバル参加公演である。

今年も実にいろいろな人に出会い、さまざまな経験に興奮した。とりわけ今、シャトレ駅からホテルのあるリヨン駅までセーヌ川沿いを高揚して歩いている。夜8時だというのに、真昼のように明るく、頭上は青い空に白い雲がかかり、川風が心地よい。アヴィニョンでは毎日、直射日光が体を射抜くようで、日陰を求めて蛇行して歩いていたが、ここパリでは朝に塗った日焼け止めクリームがしっかりブロックしてくれそうな和らいだ日差しだ。

今日はリヨン駅近くの人気クレープ店で夕食をとろう、と同行の奈舟（なしゅう）さんと快調に歩く。リヨン駅に着くまで6つの橋げたをくぐらなければならない。ふとエッフェル塔がある西の方角を見ると、暗い雲が垂れ込め始めた。何のくすみもない真っ青な空を3週間見続けた私には懐かしい曇り空だ。2つ目の橋の下をくぐり、ノートルダム寺院のあるシテ島を望む椅子に腰を掛け、しばらく無言でセーヌ川を行きかう遊覧船を見つめていた。先ほど、パリの小さな劇場の日本人女性プロデューサーの「エグクさんの公演“サロメ”が私の中ではアヴィニョンでベスト3に入ります。」との言葉が私を興奮させている。ベスト3、彼女は本当にそう思ってくれたのだろうか。

我々舞台人はいつもそんな装飾もお世辞もない、心からふと出た言葉を待っている。私達は自分の公演が気に入ってもらえたのか、受け入れられているのか、いつもどきどきして、見てくださった方の顔色をうかがっている。そんな心配そうな目でみつめられて、ついお世辞で褒めてしまう友人たちも多い。特に同業者のほめ言葉には要注意だ。褒められることがどれ程我々を勇気付けるか知っているので、心にもない褒め言葉をさらりと出す。それを真に受けて自分は素晴らしい公演をした、と勘違いすることだけは避けなければならない。勘違いの落とし穴があちこちにゴロゴロしている。自分の不出来を知らないのは自分だけ、自分一人でいい気になって回りがシーンと静まりかえっている寂しい状況が展開される。

パリの日本人女性プロデューサーに、私が「13年間アヴィニョン・フェスティバルに通ったけれど、これからどうしたらいいか悩んでいる。」と打ち明けた直後に彼女から出た言葉が“ベスト3”であった。思わず顔を上げ彼女を見つめてしまった。ありがとう、本当にありがとう、小さな声で言った。私にとっては感動的な瞬間だった。

フェスティバル期間中、過去何度か道で会い、私の公演にも何回か来てくれた彼女は、アヴィニョンでは劇場スタッフ達にも一目置かれているようで、彼女がチケット売り場に行くときとさっと招待券が出てくる。今年アヴィニョンのある劇場で彼女に会った時、「フ

ランスで何をしていたらっしゃるのですか？」と聞いてみた。「パリの小さな劇場のプロデュースをしています。」「パリで2泊するので、是非劇場を見せてください。」「土日はお休みなので月曜日に。」と快く承諾してくれた。

約束通り、今日午後6時にシャトレ駅近くの彼女のオフィスビルを訪ねた。私がアヴィニオンで見た40以上の公演の中で、自分の公演がベスト3に入る、などおこがましくてとても言えない。どれも緻密で独創性に富み、稽古量も並ではない公演ばかりである。お世辞だろうか、彼女は、はずれ公演ばかり見たのだろうか。しかしフランスに20年以上住み、フランスに来る日本人の公演をほとんどチェックし続けている彼女の言うことを信じよう、信じて次への糧にさせてもらおうと思った。

私のような、日本舞踊を基礎にしているとはいえ、自作の創作活動をしている者は古典の継承を主にしている日本舞踊界ではアウトロー的存在で、日本では自主公演以外に発表の場がほとんどない。自分が自分を叱咤激励する活動が続いている。1200公演全てが公演カンパニーのオリジナル作品であるアヴィニオン・フェスティバルのような場所は伝統を重んじる日本では有り得ないだろう。自分の作品を発表する場所探しに四苦八苦している私に“ベスト3”の言葉は余りにも重い。もう少しだけ創作活動を続けてみよう。

ふと見上げると、エッフェル塔上空にあった暗雲は私達の頭上まで来ている。ついにぽつりぽつりと雨が降り出した。雨は次第に強くなり、私たちの簡易折りたたみ傘では太刀打ちできなくなり、セーヌ川に浮かぶもう一つの島、サンルイ島に掛るルイ・フィリップ橋の下に逃げ込んだ。パリでもアヴィニオンでも雨傘など持っている人はいない。皆、やむまで待とうホトトギス、である。ますます強くなる雨脚を眺めながら、アヴィニオンでの身が救われるような言葉を思い出していた。1200以上のカンパニーが終日公演をする巨大フェスティバルでは、自分以外の芸人たちがどれも素晴らしく見える。時々、なぜこんな自分が恥ずかしげもなく、こんな強烈な場所で公演できているのかわからなくなり、頭をかかえ自分を見失いそうになる。そのような時、神の声のように聞こえるのが、公演後入り口で待っていてくれたり、道で会った人々の、素敵だった、感動したよ、という一言だ。見知らぬ人々からそのような言葉を掛けられた時、明日もがんばろう、という単純なやる気がふつふつと湧いてきて、ありがとう、と思わず頭を下げる。

パリの劇場プロデューサーはこうも言った。今まであなたが公演をしているガレーシシアターに悪いと思いきい出せなかったけれど、エギクさんがよかったらこの劇場と、ケルンの劇場で公演して下さい。あともう一カ国どこか探し、三カ国公演にしましょう。私は、このチャンスを逃してなるものか、と思わず「来年の10月でお願いいたします。」と身を乗り出した。ではこれからはネットで打ち合わせ、といともあっさり三カ国公演ツアー準備が始動した。10年前のブルゴーニュ地方リゾリアス劇場主催フランス三都市公演後、幾度か頂いた公演依頼であるが、フランス人プロデューサーとの直接交渉はいつも立ち消えてしまう。自分の公演を自分の自主公演ではなく、劇場主催公演としてやってもらいたい、という思いはリゾリアスシアター以来10年の歳月を経て再び実現

しそうだ。“夢は常に持つべきだ”という言葉が現実味を帯びる。

パリの雨は30分程して上がり、私達は再びリヨン駅に向かって歩き始めた。ようやく日が落ち、セヌ川の遊覧船ムッシュバトーの観光客達も甲板に繰り出してきた。30分毎に雪が降り注ぐようなキラキラしたイルミネーションに飾られる美しいエッフェル塔を、今年は見ることができないだろう。サンルイ島を過ぎ、程なくリヨン近くのバスチーユの塔が見えてきた。庶民達が立ち上がり、国を変えた革命の記念塔先端に羽ばたく黄金の天使像を見上げながら、演劇祭主催公演で見た、黒人のダンス公演を思い出していた。人種差別の苦しみを表現した迫力の黒人ダンスに、白人達が絶大な拍手を送った。芸術は喜びも悲しみも愛情も憎悪も肌の色も民族も、何もかも超えて全てを感動という風呂敷で包み込んでしまう。

ビバッ、フランス！ビバッ、アヴィニョン！！



法王庁広場で大道芸

道で宣伝活動

アヴィニョンの日本舞踊愛好家
リサとリアンヌとマリアヌ



アヴィニョンの我が家の入口と前の道
いざ、チラシを配りながら劇場へ